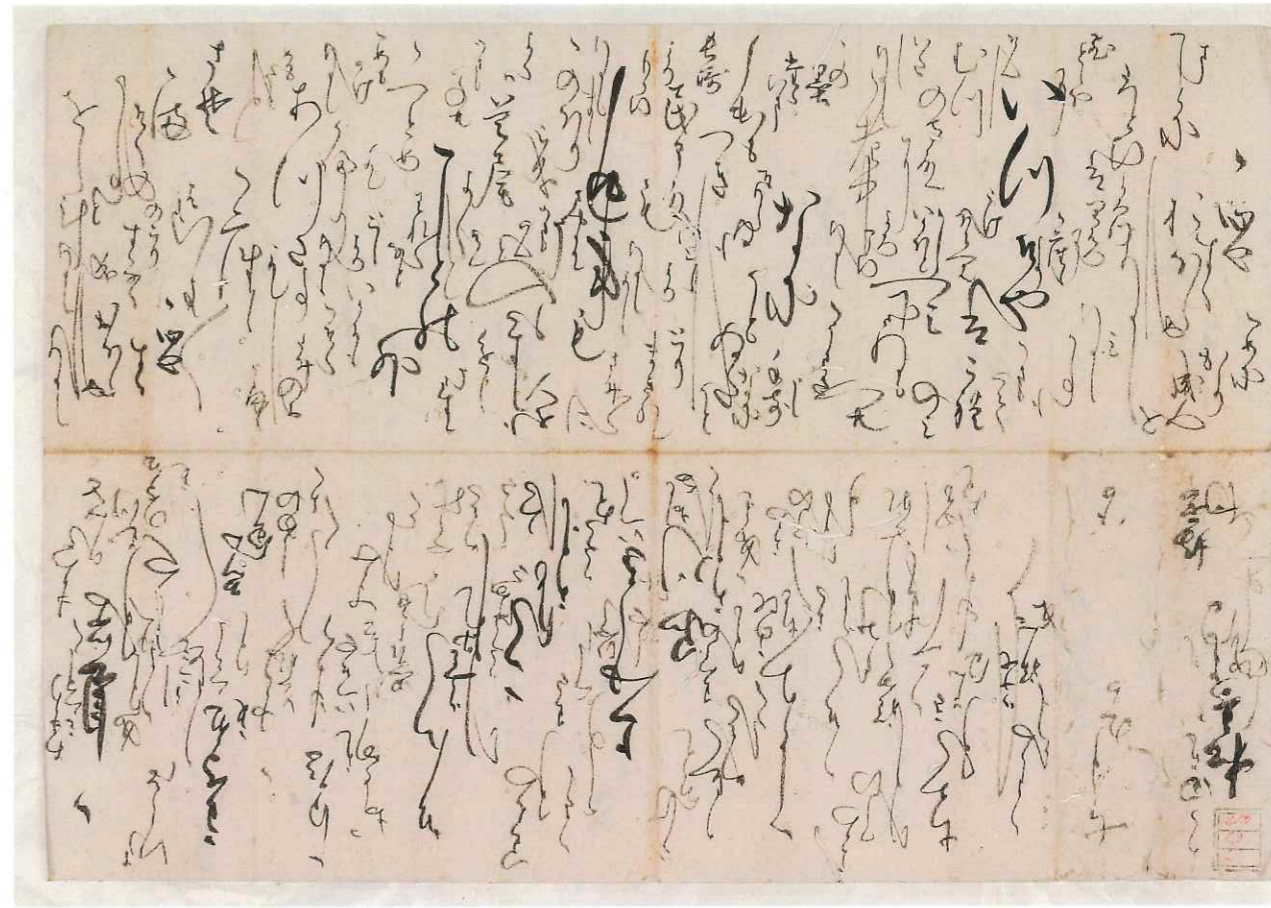
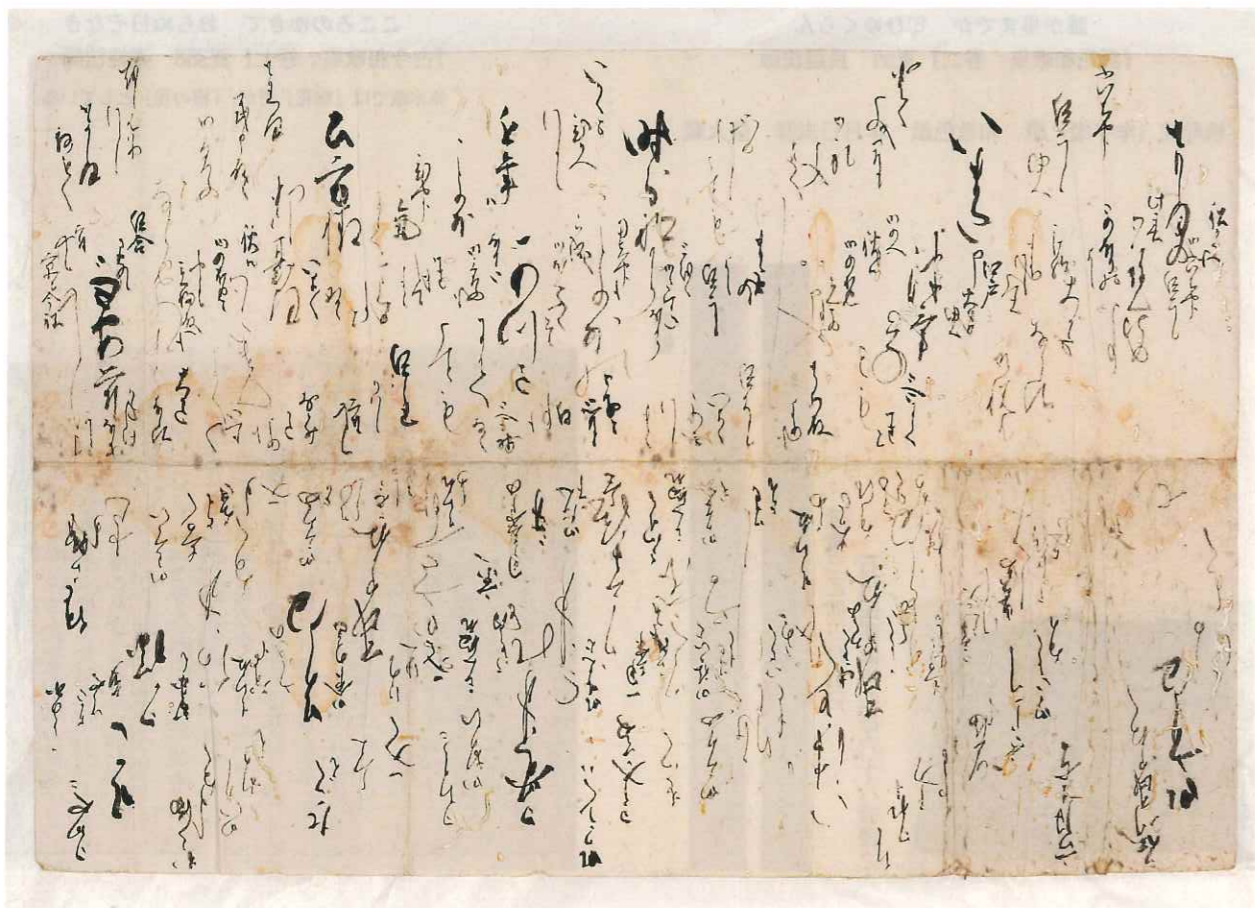


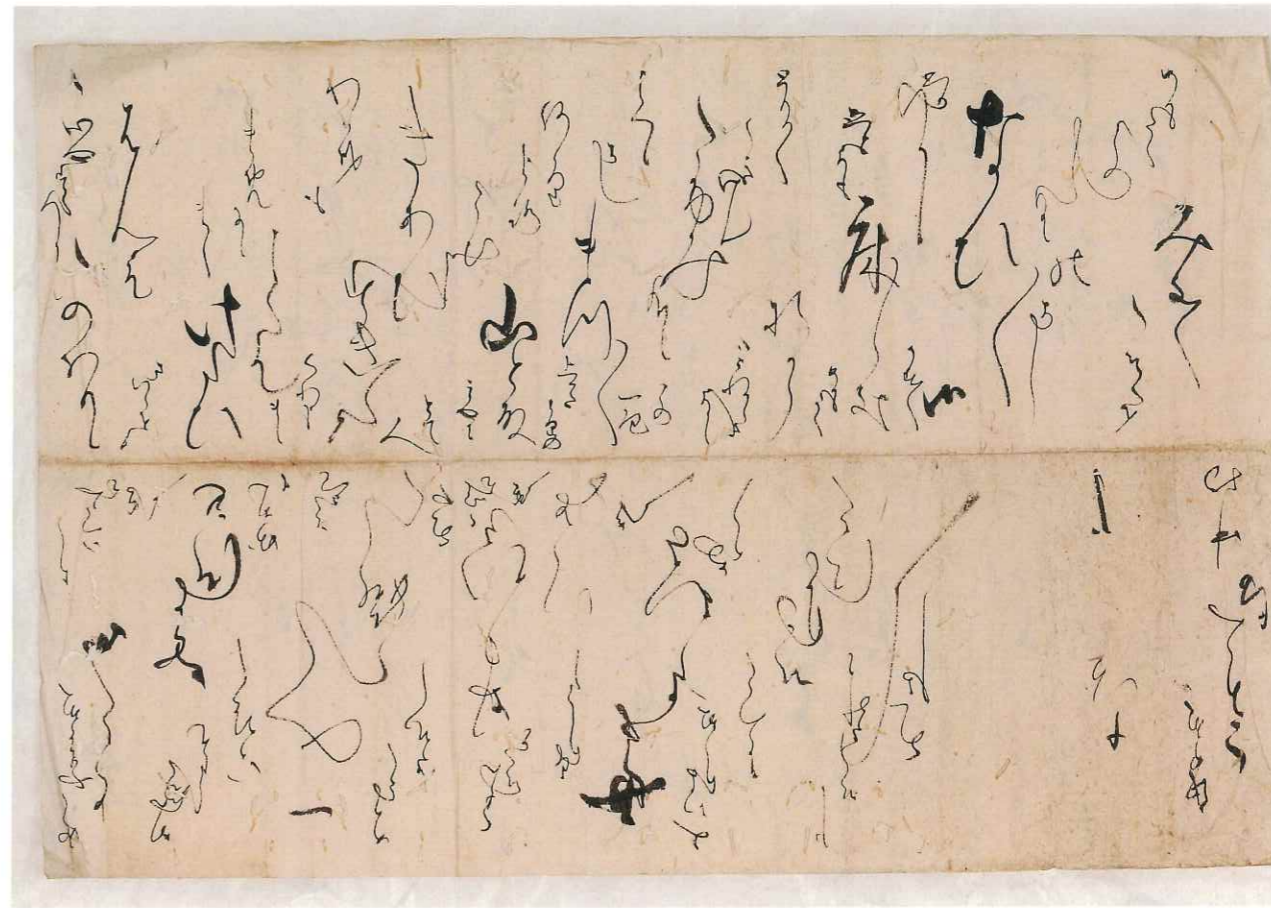
帥局消息 牟宇姫宛 (万治4年4月10日カ) [7-57-51-7] 石川家資料 37.5cm×52.6cm (No35)



鍋姫消息 牟宇姫宛 (延宝2年) 7月9日 [7-57-418-1] 石川家資料 31.3cm×45.3cm (No11)



七消息 牟宇姫宛 (寛文8年) 6月17日 [7-57-48-19] 石川家資料 35.0cm×51.5cm (No47)



中将消息 牟宇姫宛 (正保3年カ月未詳) 18日 [7-57-49-27] 石川家資料 34.8cm×51.8cm (No17)

目次

口絵
 発刊によせて
 凡例
 目次
 牟宇姫関連略系図
 牟宇姫への手紙三 後水尾天皇女房帥局ほか女性編について…………… 1

義姫(祖母・山形城主最上義守娘)……………

1 義姫消息 牟宇姫宛 (元和九年) 七月六日…………… 10
 義姫、口内を損さす
 2 義姫消息 牟宇姫宛 (元和九年) 七月八日…………… 12
 度々の見舞い

千菊姫(妹・丹後宮津藩主京極高国正室)……………

3 千菊姫消息 牟宇姫宛 (年未詳) 五月十四日…………… 16
 伊達忠宗、仙台へ帰国
 4 千菊姫消息 牟宇姫宛 年月日未詳…………… 18
 御祝儀の御礼
 5 千菊姫消息 牟宇姫宛 (寛永二十一年十月カ) 日未詳…………… 20
 陽徳院の計らい
 6 千菊姫消息 牟宇姫宛 (正保四年) 一月三日…………… 24
 石川大和の家督を祝う

鍋姫(姪・伊達忠宗長女・筑後柳川藩主立花忠茂継室)……………

7 鍋姫消息 牟宇姫宛 (万治三年) 月日未詳…………… 30
 牟宇姫、祝儀を贈る
 8 鍋姫消息 牟宇姫宛 (寛文三年十一月) 日未詳…………… 32
 伊達亀千代、袴着
 9 鍋姫消息 牟宇姫宛 (寛文三年十二月カ) 日未詳…………… 36
 立花鑑虎の祝言調う

鍋姫消息 牟宇姫宛 (寛文七年) 月日未詳……………

10 鍋姫消息 牟宇姫宛 (寛文七年) 月日未詳…………… 38
 石川宗弘、養子を迎える
 11 鍋姫消息 牟宇姫宛 (延宝二年) 七月九日…………… 42
 伊達綱村の縁談
 12 鍋姫消息 牟宇姫宛 (延宝四年八月) 日未詳…………… 46
 石川主馬、鍋姫に会う
 13 鍋姫消息 牟宇姫宛 (延宝五年六月カ) 日未詳…………… 48
 伊達綱村の祝儀調う
 14 鍋姫消息 牟宇姫宛 (延宝七年) 月日未詳…………… 52
 石川主馬、江戸へ上る

中将(伊達家奥女中・長宗我部元親三女阿古)……………

15 中将消息 牟宇姫宛 (年月未詳) 十九日…………… 60
 千代鶴、元服
 16 中将消息 牟宇姫宛 (年月未詳) 三十日…………… 64
 近況伺い
 17 中将消息 牟宇姫宛 (正保三年カ月未詳) 十八日…………… 68
 石川宗弘、病快復

雑……………

18 鶴消息 中将宛 (正保二年カ) 五月十二日…………… 76
 宇和島藩江戸屋敷にて
 19 ちき消息 はせを宛 (年月未詳) 十二日…………… 78
 牟宇姫没後…女たちの日常
 20 五さ消息 石川宗恒宛 (元禄六年月未詳) 二十五日…………… 82
 牟宇姫没後…養子を請う
 21 某消息 御かもしさま宛 年月日未詳…………… 86
 菖蒲の御祝儀
 22 か消息 五もし宛 (年日未詳) 二月…………… 88
 暮れの御祝い
 23 某消息 宛所未詳 年月日未詳…………… 90
 ご機嫌伺い

補遺……………

24 五郎八姫消息 お山宛 (慶長十九年) 四月十五日…………… 94
 御普請につき、政宗来訪
 参考 伊達政宗辞世 | 五郎八へ…………… 97
 伊達政宗辞世 | 五郎八へ…………… 97
 伊達忠宗消息 牟宇姫宛 年月日未詳…………… 98
 心待ち

牟宇姫と京都とのつながり……………

帥局(後水尾天皇女房・水無瀬氏成娘氏子)……………

26 帥局消息 牟宇姫宛 年月日未詳…………… 118
 石川家使者、京へ上る
 27 帥局消息 牟宇姫宛 年月日未詳…………… 122
 仙洞様へ鶴献上
 28 帥局消息 牟宇姫宛 (明暦三年) 三月二十七日…………… 128
 明暦の大火
 29 帥局消息 牟宇姫宛 (年未詳) 七月十日…………… 132
 音信の途絶え
 30 帥局消息 牟宇姫宛 (明暦四年カ) 三月二十八日…………… 136
 石川家、御室御所へ使者を遣わす
 31 帥局消息 牟宇姫宛 (明暦四年) 七月二十二日…………… 140
 伊達忠宗、仙台に没す
 32 帥局消息 牟宇姫宛 (万治二年) 月日未詳…………… 144
 伊達綱宗、家督相続
 33 帥局消息 牟宇姫宛 年月日未詳…………… 148
 水無瀬家使者星坂左京、角田へ下る
 34 帥局消息 牟宇姫宛 (万治三年カ) 月日未詳…………… 152
 星坂左京、帰京の報せ
 35 帥局消息 牟宇姫宛 (万治四年四月十日カ)…………… 156
 京都大火、御所炎上
 36 帥局消息 牟宇姫宛 年月日未詳…………… 162
 梁姫、虫気快復

37	帥局消息 牟宇姫宛 御孫ご覽ぜられたきこと	(寛文二年) 月日未詳	166
38	帥局消息 牟宇姫宛 懐妊への期待	年月日未詳	170
39	帥局消息 牟宇姫宛 石川家使者上達左門、京へ上る	年月日未詳	174
40	帥局消息 牟宇姫宛 安養寺、京にて長逗留	年月日未詳	178
41	帥局消息 牟宇姫宛 梁姫、病む	(寛文七年カ) 月日未詳	182
42	帥局消息 牟宇姫宛 梁姫の病状	(寛文七年カ) 月日未詳	188
43	帥局消息 牟宇姫宛 京の名医	(寛文八年カ) 月日未詳	192
44	帥局消息 牟宇姫宛 梁姫の死：帥局、病に伏す	(寛文八年カ) 月日未詳	196
45	帥局消息 じしやう院さま宛 慰め	年月日未詳	200
46	帥局消息 石川宗弘宛 かえらぬ事	年月日未詳	206
七	(水無瀬家一門カ)		210
47	七消息 牟宇姫宛 七の歎願	(寛文八年) 六月十七日	212
48	七消息 牟宇姫宛 絶縁	(寛文八年) 月日未詳	216

牟宇姫への手紙三 後水尾天皇女房帥局ほか女性編について

一、はじめに
碓子 幸枝

牟宇姫(1608~83)は仙台藩初代藩主・伊達政宗(1567~1636)の第九子、次女である。母は柴田氏お山(1587~1668)。慶長13年(1608)政宗42歳の折に仙台城で誕生した。牟宇姫は元和5年(1619)2月10日、12歳で一つ年上の石川宗敬(1607~68)と結婚。石川氏は伊達家臣団の筆頭で、家格は一門。角田(宮城県角田市)で2万1千380石を領した。牟宇姫は、14人兄妹の中では一番の長生きで、76歳の天寿を全う。政宗譲りの筆まめぶりで、生涯にわたり多くの人と手紙を交わし、様々な情報を入力していたと思われる。

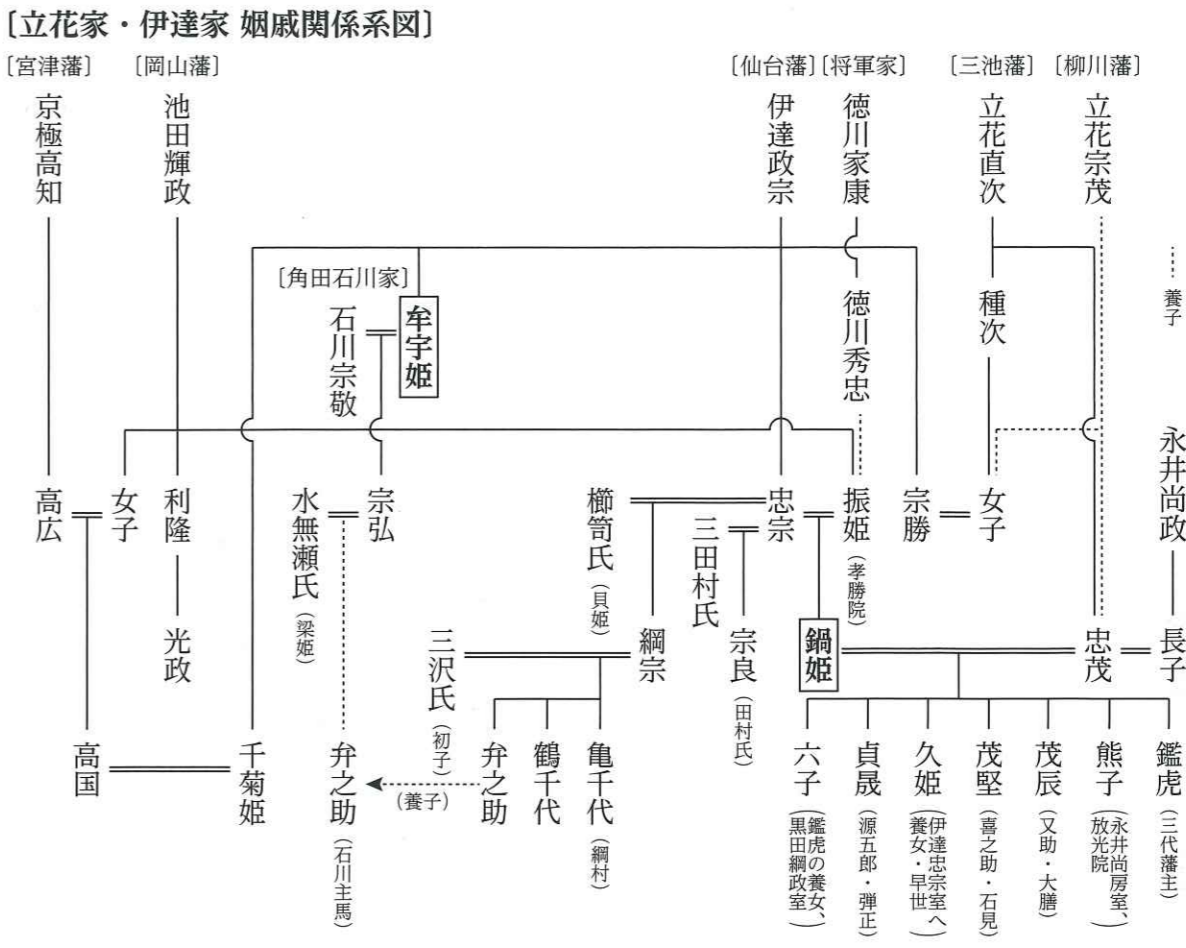
角田市郷土資料館(以下、資料館と略す)が収蔵する石川家資料の中に、牟宇姫宛と思われる手紙の差出人とその数を書き出した「覚書」(次頁参照)があるが、差出人は父・伊達政宗や兄弟姉妹など総勢9人。手紙の数は485通にのぼる。市史編纂を目的とした昭和50年代の調査時には、政宗の手紙の殆どが散逸、その他の手紙が確認された記録も残っていない。そのような中、資料館が平成26年に行った牟宇姫に関する調査の折、収蔵資料の中に、内容不明として整理されていた約150通の手紙(消息)を確認。その多くは牟宇姫宛で、一部は「覚書」に記された手紙であろうと判断された。以来、資料館ではこれらの史料を『角田市文化財調査報告書 牟宇姫への手紙』(全三巻)として刊行すべく調査解読を行ってきた。最終巻となる本書には48通(資料数49点)を収録。調査した手紙は全部で152通にのぼる【表1】。

参考	水無瀬三位消息 牟宇姫宛(当館所蔵以外)	220
	この春のめでたさ	
	収録資料一覧	222
	牟宇姫関連年表	226
	あながき	231
	主な参考文献・協力者	232

【表1】手紙の数量と内訳

差出人別内訳	単位：通	備考	報告書収録
五郎八姫(政宗長女)	48	内、2通はお山宛て	第53集 牟宇姫への手紙一 47通
伊達政宗(牟宇姫父)	13	内、1通はお山宛て	第55集 牟宇姫への手紙三 1通
石川宗敬(牟宇姫夫)	1		第54集 牟宇姫への手紙二
伊達秀宗(政宗長男)	3		第54集 牟宇姫への手紙二
伊達忠宗(政宗次男)	22		第54集 牟宇姫への手紙二 21通
伊達宗高(政宗七男)	12		第55集 牟宇姫への手紙三 1通
伊達宗勝(政宗十男)	1		
伊達宗利(秀宗嗣子)	2		
伊達光宗カ(忠宗次男)	2		
義姫(政宗母)	2		第55集 牟宇姫への手紙三
千菊姫(政宗四女)	4		
鍋姫(忠宗長女)	8		
帥局(後水尾天皇女房) 公家水無瀬家	21	内、1通は石川宗弘宛て	
七(公家水無瀬家)	2		
中将(政宗侍女)	3		
不明(雑)	6	〔7-57-49-36〕と〔7-57-59-12〕は合わせて一通	
合計	152		調査資料数153点

鍋姫（姪・伊達忠宗長女・筑後柳川藩主立花忠茂継室）



告にも耳を傾けなかったからだという。その後、伊達家では家中の対立が繰り返され、寛文11年（1671）家臣原田宗輔による刃傷事件に至る過程がいわゆる寛文事件（伊達騒動）である。

この間、鍋姫の夫立花忠茂は、池田家、京極家といった伊達家の親族大名らとともに綱宗に意見し、長く伊達家の相談役を務めることになる。このような事情から、鍋姫は嫁いだ後も生涯伊達家と密接なつながりをもっており、『伊達家文書』には、伊達綱宗・綱村親子をはじめとした伊達家の人々との交流をしめす手紙が数多く収録されている。

夫忠茂が「表向」の相談役である一方、伊達家の「奥向」を支えたのは鍋姫ではなかったか。三代綱宗の逼塞で正室不在となった仙台藩は、四代綱村の正室仙姫が延宝6年（1678）に江戸城大奥との交流を再開させるまでの18年間、「大奥」に「女使（御城使）」を派遣することができなかった。「女使」とは大名家から大奥に派遣される使者で、大奥で将軍や御台に面することが許されていた。

大奥において、大奥女中が将軍の内意を伝え、あるいは大名たちからの内々の願いや伺いを将軍に伝えることを内証行為というが、「実質的な意思決定は内証行為が進められ、表向での正式な意思決定がなされる」といったことが行われ、繰り返し問題視されたものの、これこそが大奥女中の政治力であり、「表向」での意思決定に大きな影響力を持っていた。

徳川の血脈を持ち、江戸城大奥をはじめ様々な「奥向」の交渉ルートが使えたとあろう鍋姫は、この時期の伊達家にとって非常に心強い存在であったと思われる。

延宝3年（1675）9月19日、夫立花忠茂が死去。鍋姫が「貞照」と称し「法雲院」と号すのは忠茂没後のことと思われる。

一、鍋姫（法雲院）

鍋姫（法雲院1623〜80）は仙台藩二代藩主・伊達忠宗（1599〜1658）の第一子、長女である。元和9年（1623）6月14日、仙台藩江戸屋敷で生まれた。母は正室・徳川氏振姫（孝勝院）。伊達忠宗の子は10人とされるが、娘は鍋姫一人である。鍋姫はその血筋から言っても伊達家最高の血族であった。

鍋姫は寛永21年（1644）4月18日、筑後（福岡県）柳川藩主・立花忠茂（好雪1612〜75）に継室として嫁ぎ、翌年の正保2年（1645）11月に嫡子大助（鑑虎）を出産。『柳川市史 別編 図説立花家記』によると大助以下4男3女をもうけたとされる。

一方、仙台藩伊達家では、鍋姫が嫁いだ翌年、将来を嘱望された同腹の弟光宗が19歳で急逝、異母弟の巳之助（綱宗）が新たな後継者となった。明暦4年（1658）7月12日、父忠宗が死去。60歳。翌年には母振姫も江戸で没した。このころから、仙台藩では政情が不安定なものになっていく。

家督を継ぎ三代藩主となった綱宗の生母は京都公家榊原隆致の末娘貝姫。貝姫の姉榊原隆子（逢春門院1604〜85）は後水尾天皇に仕え、初め四条、のちに「御匣」と称し、6皇子4皇女を儲けた女房。綱宗の従兄にあたる良仁親王（花町宮1637〜85）は、明暦2年（1656）に即位し、第11代後西天皇（在位1654〜63）となった。『治家記録』には、綱宗が榊原家に様々な品を贈っては手紙を交わしていた様子が記されている。

そのような中、綱宗は不行跡を理由に僅か2年で藩主の座を追われ、2歳の息子亀千代（綱村）による家督相続と綱宗の隠居が命じられた。江戸幕府の正史『徳川実紀』はその理由を酒と女におぼれ、家臣の忠

鍋姫は生涯を江戸で暮らし、延宝8年（1680）2月2日死去。58歳。墓所は江戸小石川の徳雲寺（東京都文京区小日向）。法雲院龍珠貞照大夫人と号した。国元には息子の鑑虎が鍋姫（法雲院）の菩提を弔うために法雲寺（大牟田市倉永）を建立している。

二、鍋姫（法雲院）の夫立花忠茂

鍋姫の夫立花忠茂は柳川藩初代藩主・立花宗茂の実弟直次の四男。誕生後まもなく実子のない宗茂の養嗣子に迎えられ二代藩主となった。寛永7年（1630）12月、忠茂は正室に永井尚政の女・長子（玉樹院）を迎えるが、4年後の寛永11年に死去。早世の子が一人いたともいわれている。その当時、永井尚政は下総古河八万九千石を領する譜代大名。大御所徳川秀忠に仕えた西の丸老中で、秀忠の意向による縁談であったと見られている。

それから10年ほど後の寛永20年（1643）12月28日、忠茂は將軍徳川家光から、仙台藩二代藩主・伊達忠宗の娘鍋姫との縁組を申し渡された。「立花家文書」の「柳川御留守居中へ被遣候御書扣」によれば、忠茂は六十二万石の大大名との縁談に「釣り合わぬ身躰」と内心遠慮をしたものの、婚儀は翌年の寛永21年（1644）4月18日に執り行われた。忠茂33歳。鍋姫22歳。

忠茂は寛永18年（1641）従四位下に叙され明暦3年（1657）12月27日には侍従に進んだ。万治2年（1659）12月28日、48歳で飛騨守に任じられ、これに伴い嫡子鑑虎に従五位下・左近将監が認められた。以後も立花氏は従五位下に始まり、従四位下・侍従が上限とされ、左近将監か飛騨守に任ぜられるのが恒例となった。寛文4年（1664）以降は、石高十萬石以上・侍従の格式に伴った様式で領知判物を与え

【原文】

おほしめしより候て、御ふ(文)ミ下され、かす(数々)くうれしくおもひまいらせ候、世も寒さにて候へ共、そこもと、御とり(如)く御息災のよし、何より(柄)くめてたく思ひまいらせ候、仰のごとく、亀千代殿も、この十日に、日(柄)からよく、はかま(袴着)きにて、かす(先ず)くめてたさ、いつしか、おとな(大人)しく御なり候て、かしく、

よろこひ申候事、御す(推文字)もしなされ候へく候、き(義山様)さんさま、孝勝院さま御さ候ハ、いかほとく御まん(満足)そくかりにて候ハん物をと、これにつけ候ても申くらしまいらせ候、ま(先ず)つく民部殿、いまほとハ、するか殿と申、大和殿も民部殿(被成候よし)、かす(成)くめてたさ、とりく御はん(繁盛)しやうの御事にて、弾正殿にも、御子たち、せい人のよし、誠にくめてたさ、そ(其文字)もしさま、さそやく御まん(満足)そくの御事と、をし(推量)はかりまいらせ候、こ(元)もとも、とりくそくさいに、左近(孫)も首尾よく、し(祝言)うけん(調)とのひまいらせ候て、いまほとハ、国もとへたちまいらせ候、越中殿(段)も、一たんくそくさいに、ま(愛)子、五もしも、せい人(致)ゐたし、よろこひまいらせ候、いつもく御あいらしく御たつね、かす(数々)くうれしく思ひまいらせ候、き(義山様)さんさま、御さ候ハねは、いつかた(遠々)も、御とをくしく成まいらせ候、めてたく、かしく

5

【解説】 伊達亀千代、袴着

仙台藩二代藩主・伊達忠宗の長女・鍋姫(法雲院1623～80)から叔母の牟宇姫に宛てた手紙。鍋姫は寛永21年(1644)4月筑後(福岡県)柳川藩主・立花忠茂(雪好1612～75)に嫁し、鑑虎以下4男3女をもうけたとされる。手紙が書かれたのは寛文3年(1663)11月10日以降、月末までの間。鍋姫41歳。牟宇姫は56歳。手紙に登場する「亀千代」は仙台藩四代藩主・伊達綱村(1659～1719)の幼名。亀千代の父綱宗は「不行儀」「不作法」といった不行跡を理由に、藩主となって僅か2年で幕府から逼塞を言い渡された。「逼塞」とは門を閉ざして白昼の出入りをゆるさないこと。21歳の綱宗は隠居を命じられ、2歳の亀千代が藩主となった。鍋姫の夫忠茂は長く伊達家の相談役を担うことになる。

一つ目の話題、「亀千代の袴着」が行われたのは寛文3年(1663)11月10日、5歳のとき。『治家記録』には「立花忠茂が仙台藩の浜屋敷に来駕。書院において御袴着御結腰のご作法あり」と記されている。「袴着」とは幼児に初めて袴をはかせる儀式。江戸時代以降5歳の男児に定着した(『ブリタニカ国際大百科事典』)。腰紐を結ぶのを有力者に依頼することも多く、鍋姫の夫忠茂がその役を担ったようである。

二つ目の話題は、石川宗敬と長男宗弘の呼称について。寛文3年(1663)10月、牟宇姫の夫石川宗敬は「民部」から「駿河」に、息子の宗弘は「大和」から「民部」に代わっている。又、「弾正殿」とは牟宇姫の長女千代鶴が嫁いだ岩出山伊達家二代・伊達弾正宗敏(1625～78)のこと。「御子たちも成人とのこと」と語り、牟宇姫の外孫の話題にも触れている。

一方、鍋姫側の話題としては「左近」の祝言が調い、今ほどは国元の

(駿河) するか殿

御うもしさま

(鍋) な

御返事 人々

申給へ

【大意】

お手紙を頂戴し大変うれしく思います。寒い季節ですが皆様お元気でいらっしゃるの、何よりでございます。亀千代殿(伊達綱村)も日柄良く十日に袴着をなされ、誠におめでたく、義山様(伊達忠宗)、孝勝院様(忠宗正室・振姫)がご存命であれば、どれ程お喜びかと語り合っております。

ところで、民部殿(石川宗敬)は今、駿河殿と申し、大和殿(石川宗弘)が民部殿になられたとのこと。おめでとうございます。それぞれにご繁盛なされ、弾正殿(伊達宗敏)の御子たちも成人とのこと、それも様(牟宇姫)も、さぞご満足のことでしよう。

此方も皆元気でおります。左近(立花鑑虎)の祝言も首尾よく調い、今は国元(筑後柳川)へ発ちました。越中殿(永井越中守尚房)も一段と息災で、孫、娘も成人いたし喜んでおります。

(牟宇姫様から) いつもく、お愛らしくお尋ねがあり、とても嬉しく思っております。義山様(伊達忠宗)が亡くなられてからは、いずれの方々とも疎遠になってしまいました。めでたく、かしく。

筑後柳川(福岡県柳川市)へ向けて江戸を発つたと伝えている。

「左近」は立花忠茂と鍋姫の息子で幼名「大助」(1645～1702)。この時19歳。実名は始め「直茂」、のち「廣茂」「鑑茂」「鑑虎」の順に改まる。万治2年(1659)12月28日、父忠茂が飛騨守に任ぜられ、これに伴い嫡子鑑虎に従五位下・左近将監が認められた。

鑑虎の正室は譜代大名本多俊次の子康長の娘。『柳川の歴史4 近世大名立花家』(柳川市 平成24年)343頁には、「鑑虎は家督を継承した翌年の寛文5年(1665)4月22日、幕府から暇を許され、ほどなく初帰国を果たした」とあるが、この手紙にある鑑虎(左近)の帰国は家督となる以前のもの。『柳川市史 別編 図説 立花家記』によると、江戸から筑後柳川への移動にかかる日数は通常38日程度。陸路だと一日に八里から十里ほど(30～40km)を進んだようである。

又、「越中殿」とは永井尚政(1587～1668)の孫、永井越中守尚房であろう。鍋姫の娘熊子が万治元年(1658)に嫁いでいる。文末の「義山様」とは、仙台藩二代藩主・伊達忠宗(1599～1658)のこと。鍋姫の父であり、牟宇姫の兄である。手紙は忠宗が没した5年後に書かれているが、「義山様(伊達忠宗)が亡くなられてからは、いずれの方々とも疎遠になってしまいました」と語り、昔を懐かしむ寂しさを感じられる。

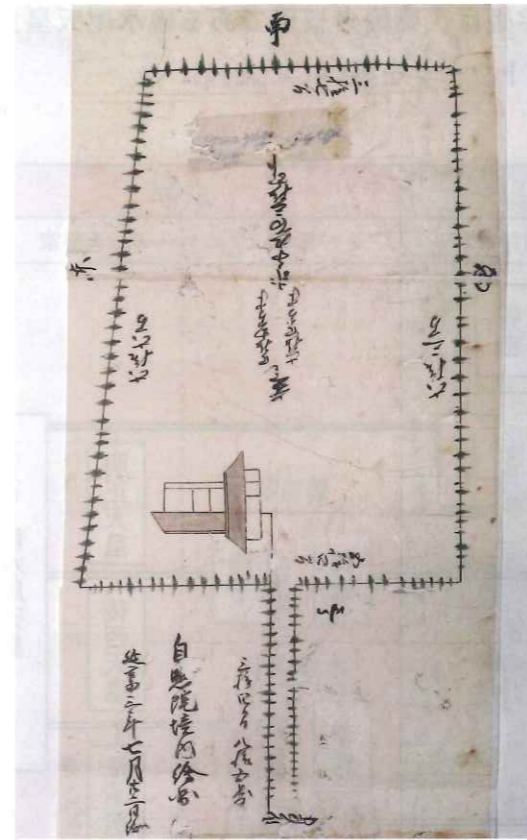
疎遠となった理由の一つは、三代藩主・伊達綱宗の逼塞であろう。他家との付き合いにも何かと気遣いが必要であった事情が推測できる。

かくだ はり
角田に残る梁姫のあしあと

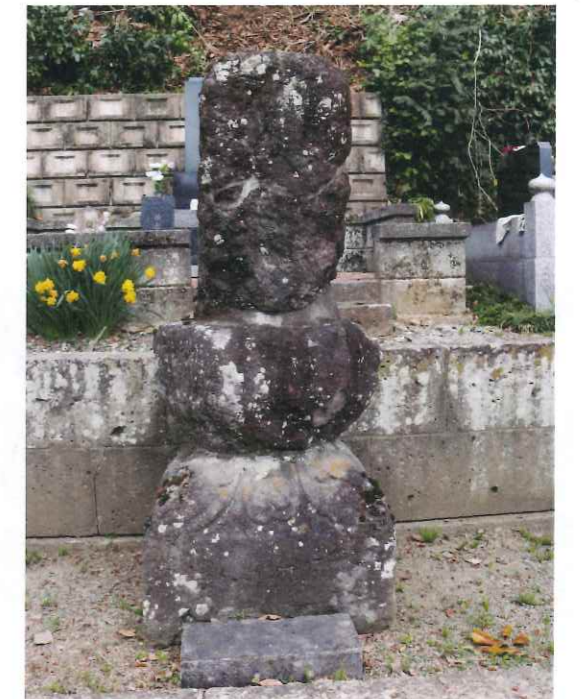
14歳で京都の公家水無瀬家から角田石川家4代宗弘のもとへ嫁いできた梁姫は、26歳で亡くなるまで、約12年を角田の地で過ごした。



自照院跡から南をのぞむ（角田市佐倉字小山東）
絵図にある境内への道が今も残る。自照院は、久しく廃寺になっていたが、慶応年間に再興され、昭和16年に現在の場所（佐倉字町裏）に移転した。



自照院境内絵図（部分）当館蔵
延享3年（1746）7月22日 石川家資料
梁姫が療養のために暮らしたとされる屋敷。
梁姫亡き後は、姫の菩提を弔う寺となり、自照院と名付けられた。



梁姫の墓 長泉寺石川家古廟
寛文8年（1668）9月20日没 26歳
自照院殿玉窓妙珠大師



梵鐘 長泉寺蔵 角田市指定文化財
宗弘が氏神八幡社に納めたもの。梁姫が自ら鑄造場に出向き、炉に金銀を投じて工事の安全を祈念したと伝わる。明治10年代から昭和19年頃までは「台山の鐘」として、市民に時を報せた。

帥局（後水尾天皇女房・水無瀬氏成娘氏子）

一、牟宇姫と京都とのつながり

牟宇姫の知られざる一面に京都公家との交流がある。角田石川家は明暦2年（1656）牟宇姫の長男宗弘の正室に京都の公家、水無瀬権中納言兼俊の娘・梁姫を迎えた。水無瀬家の姻戚となったことで、牟宇姫は梁姫の叔母「帥局」と親しく手紙を交わすようになる。帥局は後水尾天皇（後に上皇・法皇となる）に仕え、一皇子二皇女を儲けた女性。皇子・性承法親王は「御室の御所様」と呼ばれ、頻繁に手紙に登場する。「御室の御所」とは京都仁和寺住職のこと。仁和寺は皇室ゆかりの門跡寺院。この当時から御室桜が有名だ。

牟宇姫と帥局の交流は、石川家と水無瀬家のトップレイ同士のお付き合い。牟宇姫からは折々の手紙に添えて糲や和紙といった仙台藩の名産品が贈られた。両家は互いに使者を遣わし、石川家資料には望まれ鷹（鶴）を贈ったとの記録も残る。対して水無瀬家からは後水尾法皇自筆の色紙のほか、御室焼茶碗や帯など京で流行りの品々が贈られた。

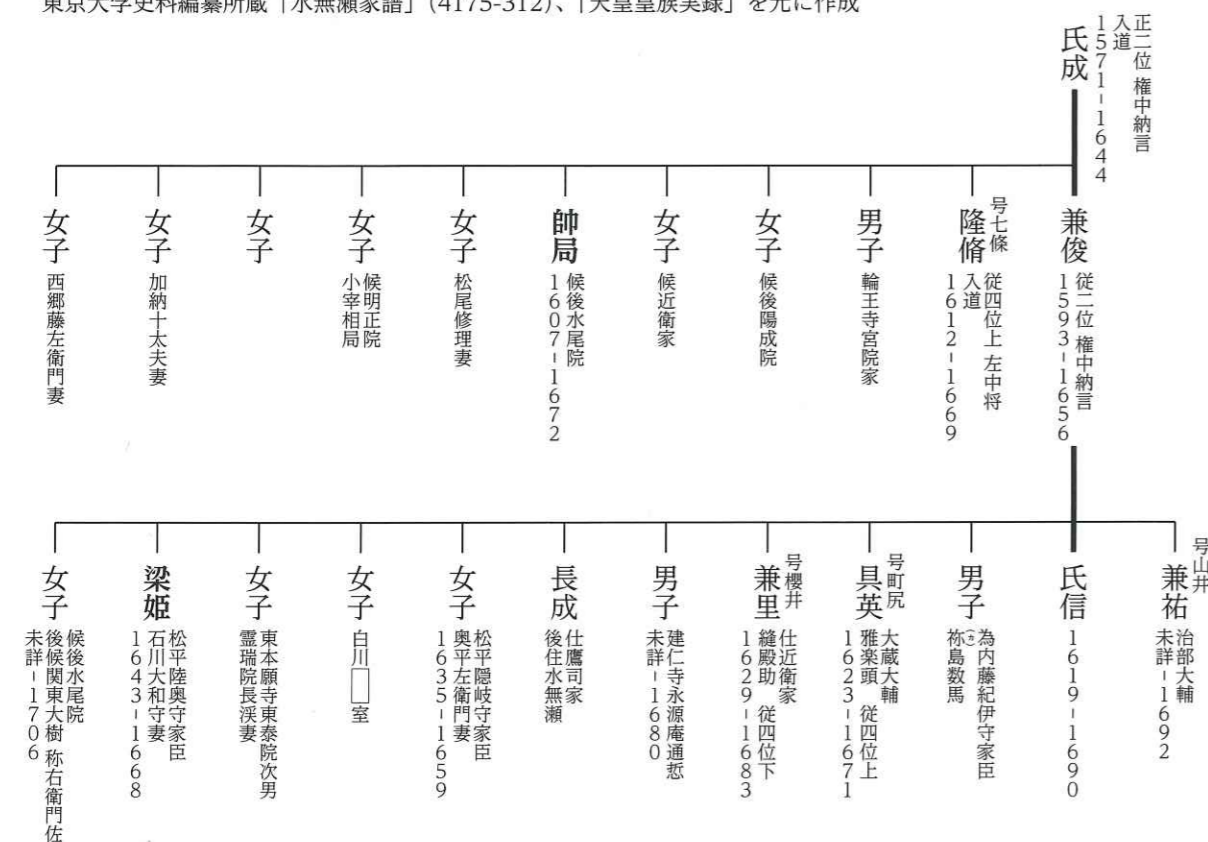
牟宇姫と公家とのつながりは、水無瀬家だけにとどまらない。兄忠宗（二代藩主）の正室振姫は、後水尾天皇の中宮・徳川和子（東福門院）の姉妹にあたり、甥綱宗（三代藩主）の生母は公家櫛笥家の息女貝姫で、後西天皇の叔母である。又、牟宇姫の長女千代鶴が嫁いだ岩出山伊達家も三代宗親に京都冷泉家から正室を迎えた。さらに、磐井郡一関三万石の大名となった弟伊達宗勝（政宗十男）の嫡男・市正宗興の正室も公家姉小路家の息女であった。

牟宇姫は公家衆との交流を通じて、京都の文物に触れ、独自のネットワークを築いていたのである。

二、帥局

[水無瀬家 略系図]

東京大学史料編纂所蔵「水無瀬家譜」（4175-312）、「天皇皇族実録」を元に作成



「帥局」は京都公家・水無瀬氏成の息女氏子のこと。氏子は慶長12年(1607)生まれ。後水尾法皇が天皇在位中から近侍していたと推定される後宮の女房で、『天皇皇族実録』(宮内省図書寮編)によると、おおよそ次のとおりである。

藤原氏子 御水尾院天皇宮人 小兵衛局 後に帥局と号す

慈性院明宵文英

権中納言正二位水無瀬氏成ノ女、母ハ権大納言正二位

高倉永相ノ女ナリ、慶長十二年、誕生ス、

又、帥局は「小兵衛局」と称した時分に一皇子二皇女を儲けている。

寛永12年(1635) 6月27日 新宮 誕生

寛永13年(1636) 7月30日 姫宮 秋光院月峯貞圓 没

寛永14年(1637) 正月18日 豊宮 性承法親王 誕生

寛永14年(1637) 8月14日 姫宮 月桂院(新宮カ) 没

『天皇皇族実録』の新宮誕生の記録には「寛永十二年六月二十七日、是ヨリ先、天皇の宮に仕へ、是日、皇女某ヲ生ム、又、皇女某モ其所生ナリ」と書かれている。

皇女一名の出生時期が未詳だが、帥局は寛永12年以前から天皇に仕え、30歳までに一皇子二皇女を出産し、皇女二人は早世したと確認できる。成人したのは性承法親王(豊宮)だけであった。

久保貴子著『後水尾天皇』によると、帥局の知行は松ヶ崎村の百石で、寛文12年(1672)に没するまで知行に変動はなかったとある。

松ヶ崎村(京都市左京区松ヶ崎)は京都の洛北に位置しており、お盆

の精霊を送る伝統行事「京都五山送り火」の「妙」・「法」の字が焚かれる場所としても知られている。

帥局は寛文12年(1672) 6月16日没、66歳。慈性院明宵文英。『雍州府志』によると、「慈祥院塔」が法金剛院内山の上(京都市右京区花園扇野町)に在るとされている。

(一) 水無瀬家

帥局の生家である水無瀬家は、藤原氏北家兼家の男道隆の後裔。坊門親信(藤原親信1137-97)を祖とする。

坊門親信は後白河院の近臣で、一族は兄信隆の娘七條院(殖子1157-1228)の生んだ後鳥羽天皇(1180-1239)の側近となった。特に親信の孫信成とその子親成は後鳥羽上皇に忠誠を尽くし、延応元年(1239)、上皇の遺書ともいえる国宝「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」により水無瀬離宮跡地をゆずられ、後生の菩提を弔うよう命じられる。跡地に御影堂(水無瀬神宮)を建て、以後、水無瀬氏を称した(『朝日日本歴史人物事典』)。

水無瀬家は堂上家で、家格は羽林家である。羽林家は摂家、清華家、大臣家に次ぐ格式の家で、昇殿を許され公卿に列することのできる家柄であった。又、帥局が生まれた江戸時代の公家は京都公家町に集住し、禁裏小番(内裏の宿直)や家職により、天皇や国家を支えることを職分とした。

帥局の姪梁姫と牟宇姫の長男宗弘の結婚は明暦2年(1656)、水無瀬家と石川家の姻戚としての付き合いは、梁姫の兄水無瀬氏信(1619-90)の代のこと。この時期の水無瀬家の京屋敷は、御所を囲んで配置された公家衆の屋敷群の一角にあった(102頁参照)。

帥局の手紙には「此の方一門、皆無事にいます」と書いた手紙が多くあるが、一門とは親族関係にある人々の総称で、支流となった七條・山井・町尻・櫻井の四家をも含んだものと思われる(系図105頁参照)。

系図を見れば、帥局以外にも姉妹や姪が御所に上がり、女房として宮中に仕えていたことが分かるが、なかでも性承法親王(豊宮・仁和寺門跡二十二世 後大御室)の生母となった帥局は、水無瀬一門の女性を代表する立場にあったと推測できる。

(二) 水無瀬駒

帥局が生きた時代の水無瀬家は能書家としても知られている。将棋の駒の字は平安時代から能筆家が書いたとされるが、水無瀬家では16世紀から17世紀中頃にかけて、兼成、親具、氏成(帥局の父)、兼俊(梁姫の父)と能筆家が続き、将棋の駒銘を書いている。水無瀬四代の手による「水無瀬駒」は「将棋駒の銘は水無瀬家の筆をもって宝とす」と称賛され、後陽成天皇や徳川家康をはじめとした時代の権力者に愛された。

水無瀬家に残る『将基馬日記』(1590-1602)は多くの貴族や武将が駒を注文した記録である。江戸時代には駒の書体の宗家とされ、水無瀬駒として珍重された(『世界大百科事典』)。

(三) 水無瀬御影堂(水無瀬神宮)

水無瀬家は京で朝廷に仕える外に、後鳥羽上皇(1180-1239)を祀る御影堂が建つ水無瀬の地で、慰霊の祭祀を行う特別な任務を担っていた。後鳥羽上皇は高倉天皇の第4皇子。母は水無瀬の一族坊門信隆の娘七條院である。上皇は皇権回復のため鎌倉幕府討幕の兵をあげた「承久の乱」(1221)で完敗し、隠岐に流され同島で没した。

水無瀬は、摂津国(大阪府)三島郡島本町広瀬の地の古称で、山城国(京都府)との境にあり、現在、水無瀬神宮が建つ地には、かつて後鳥羽上皇が愛した離宮があった。

水無瀬家の祖、坊門親信(藤原親信)の子親兼とその子信成は共に後鳥羽上皇の寵臣で、隠岐に流された上皇の遺言ともいえる国宝「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」により、信成・親成親子が水無瀬離宮の跡地を託され、上皇の御影(お姿絵)を祀った御影堂を建て、慰霊の行事をはじめたのが水無瀬神宮の起源である。

上皇崩御の年、鎌倉幕府の元勳三浦義村が急死、その翌月に北条時房も死亡。崩御から三年後には幕府執権北条泰時も死去した。悲運な最後を遂げた後鳥羽上皇の御霊に対する恐怖と畏怖は大きく、天下に凶事あることに人々は上皇の御霊を恐れたという。

南北朝の頃になると、水無瀬御影堂のために領地の安堵や寄進、課役の免除が行われた。怪異を祈禳し、御影堂に鳴動があれば直ちに祈謝を行ったという。

後世に書かれた『水無瀬宮年中行事』によると、毎月一日、十五日、二十八日には水無瀬家の当主が必ず参詣祈念し、特に二十二日の御忌日には、開扉して御供物を献じ、祝詞奏上などもあり、御祭儀のあと、和歌や蹴鞠の奉納が行われた。このほかにも一年を通し様々な祭祀が行われ、平常の管理には北面と称した星坂、小泉両家と供僧らがお仕えしていたという(水無瀬忠寿『水無瀬神宮物語』平成4年)。

北面とは院の御所の北面にある警護の武士の詰め所。また、そこに詰める武士(北面の武士)をいう。現在、水無瀬神宮の境内には「星坂神社」(※)が祀られているが、梁姫の輿入れに際し水無瀬家から石川家に遣わされた使者の名が「星坂左京」と「星坂左近」。御影堂を守護

【原文】

(大和) やまとの守殿より、はる(暹々)の所、御使のほせられ候、そこ御ほど御無
 事(詳)の御事、くはしくうけ給候て、悦入まいらせ候、ことに、ふゆとしハ、
 ほうそう御(憎)にくらし候よし、』さそく御(氣遣)つかい候や、するくくと御
 ほんふくの御事、かすくめてたさ、御まんそくおしハかりまいらせ候、
 其後、しよくなども、よくまいり候よし、ひとしほめてたさ、さやう候
 ハ、やかてく、かしく、』
 御はんしやうもおハしまし候ハんと、』御うれしき、となたもおなし御
 事にておハしまし候、むつ(陸奥)の守殿御事、うけ給候、御せうしき、いろ
 くとりさた御さ候へハ、いかほと御心もとなく御さ候つる、御
 跡目(若氣)あとの事も、かはる御事なく、かやうのめてたき御事おはしまし候ハ
 す候、御わかけにて候ま、やかてく御まへもなをり』まいらせられ
 候ハんと、御うわさ申まいらせ候、それにつき、やまとの守殿、萬事
 しゆひよくおハしまし候よし、こなたにても、とりさたうけ給候、
 (満足)まんそく申まいらせ候つる、まつく大和守殿よりも、いろくたひ
 おハしまし候、そもしさまよりも、うつくしき御なか五ゆひ下され候、』
 かすくめてたく御うれしき、幾ひさしく千世までもと、祝入まいらせ
 候、こなたにも、御室の御所さま御きげんよく、一門かた何事もおハし
 まし候ハす候ま、御心やすく覚しめし候へく候、正月十五日にハ、
 きん中仙洞(堂上方)とうしやうかた、のこらすゑんしやうにて、おそろしき御事、

陸奥守殿(伊達綱宗)のことは受け給わっております。お困り事のご様子
 が色々取り沙汰されておりましたので、どんなにか御心許なくいら
 したでしょうに、御跡目のことも変わることもなく、このようにめでた
 いことはございません。お若気の至りですから、やがて御前(徳川將軍
 家)の覚えも以前のように良くなるものと話しております。その事につ
 きましては、大和守殿(石川宗弘)は万事首尾よく動かれたとのこと、
 此の方でも御うわさを聞いて喜んでおります。

なにはともあれ、大和守殿(石川宗弘)からも色々と頂戴いたしましたし
 ました。そもし様(牟宇姫)も美しい綿五結を下されましたこと、大変めで
 たくうれしく、幾久しく千世までもとお祝いたします。

此の方でも御室の御所さま(性承法親王)はご機嫌よくお過ごし
 です。水無瀬の一門方も何事もなく暮らしておりますのでご安心くださ
 い。
 正月十五日には禁中・仙洞・堂上方が残らず炎上し、その恐ろしき
 事といいましたら、どうかご想像ください。されど、上々様方はご機嫌
 よく避難なされ、私なども何事も無くお供を致しておりますので、どう
 ぞご安心ください。

なにはともあれ、御ふもし(梁姫)も相変わらず可愛がっていただき、
 御乳(梁姫乳母)などへも大変よくして頂いていると聞いております。
 大変うれしく、遠くにおりましても安心で、何の心配もございません。
 いよいよもって万事よろしくお頼みいたします。

この帯三筋、毎度のご祝儀としてお目に掛けたくお贈りいたします。
 やがて、めでたい報せが届くことを願っております。めでたく、かしく。

おほしめしやり候へく候、さりながら、上々さまかた』御きげんよく、
 (我々)われくなども何事なく御とも申候ま、御心やすく覚しめし候へく候、
 まつく御ふもしも、あひかハらす御いもしかり、おちなとへも御
 念比の御事うけ給候、かすく御うれしき、とをくにて候へとも、
 御心やすく何のきつかいもおハしまし候ハす候、いよく萬事たのミ入
 まいらせ候、此おもし、三すち、まいとの御しうきまてに』御けさんに
 入まいらせ候、やかてくめてたき御事、うけ給候ハんと祝入まいらせ
 候、めでたく、かしく
 (ウツ書)

民部殿

御うもしさま

御返事まいる

申給へ

【大意】

大和守殿(石川宗弘)から遠路はるばる御使者が遣わされ、そちら
 のご無事な様子をくわしく聞いて喜んでおります。
 殊に、旧冬には大和守殿が痲瘡に罹られ、さぞや、お氣遣いのこと
 であつたでしょうね。無事にご快復なされ、めでたくご満足のことと思
 います。その後は食欲もありと聞きました。一層めでたく、そのような
 ご様子なら、やがてご繁盛もございましょうと嬉しく思います。

【解説】 京都大火、御所炎上

京都公家・水無瀬氏成(1571~1644)の娘氏子「帥局」(1607~72)から牟宇姫に宛てた手紙。
 手紙に日付はないものの、手紙が包まれていたと思われる上紙には卯
 月十日とあり、その内容から万治4年(1661)4月10日に書かれた
 手紙かと思われる。帥局55歳。牟宇姫54歳。
 牟宇姫の長男、石川宗弘(1630~91)の妻梁姫(1643~
 68)は、京都の公家水無瀬兼俊(1593~1656)の娘。帥局
 は梁姫の叔母で、宮中にあがり後水尾天皇(1629)に上皇。
 1651に法皇となる)との間に一皇子二皇女を儲けている。
 手紙の冒頭、石川宗弘の病氣回復の話題に触れているが、手紙が書か
 れた前年の万治3年(1660)12月、石川宗弘が痲瘡にかかったとの
 記録が残る。痲瘡とは天然痘のこと。ウイルスの感染によって起る感
 染症のひとつで高熱とともに全身に発疹が生じ、やがて化膿する。伝染
 力がきわめて強く、昔は大流行を繰り返して多数の死亡者を出した。又、
 死因は不明だが、宗弘が罹患した前月の11月16日には牟宇姫の次女正菊
 姫が27歳で亡くなっている。

この時、伊達家一門・石川家の家督を継いで15年目の宗弘は31歳、妻
 の梁姫は18歳、未だ子に恵まれない中で宗弘の発病は、石川家の存続
 にかかわる一大事であった。宗弘の順調な回復ぶりを伝え聞き、「その
 ご様子なら、やがてご繁盛もございましょう」と書いたのは、梁姫の懐
 妊を期待しての切実な言葉である。

文中の話題「陸奥守殿のこと」とは、万治3年(1660)7月18日、
 仙台藩三代藩主・伊達綱宗(1640~1711)が、幕府から逼塞を
 命じられた件。「逼塞」とは門を閉ざして白昼の出入りをゆるさないこと。